

## 16-2 資本主義的生産における農業の否定的側面

「ジョンストンやコントなどは、所有と合理的農学との矛盾に当面してただ一国の土地を一つの全体として耕作する必要を眼中においているだけである。しかし、特殊な土地生産物の栽培が市場価格の変動に左右されるということ、また、この価格変動につれてこの栽培が絶えず変化するということが、そして資本主義的生産の全精神が直接眼前の金もうけに向けられているということ、このようなことは、互いにつながっている何代もの人間の恒常的な生活条件の全体をまかなわなければならない農業とは矛盾している。その適切な一例は森林であって、森林は、ただ、それが私的所有ではなくて国家管理のもとにおかれている場合にだけいくらかは全体の利益に適合するように管理されることもあるのである。」  
(大月版『資本論』⑤ P798F8-13 本文中の注27)